

兵士は焔で採れる!?

三 春

ロシアのウクライナ侵攻以来、ロシア貿易OBたちのメールが増えた。

例えばS氏は駐在中に現地女性とのあいだに娘を設けたが、最近になって娘が反体制デモで収監中の男と獄中結婚した。近々その夫が戦線に送られることになり、臨月の腹を抱えて涙に暮れているそうだ。反体制の囚人なら最前線行きは間違いない。

N氏は、この戦争で核兵器は使われないと観ている。その背景は、スターリン時代否一九世紀のクリミア戦争時代からロシアに根付く「兵士は消耗品」という考え方だ。

ロシア国民が反戦の声を上げられないのは厳しい統制に阻まれているからだと思われがちだが、そうでもないらしい。何故なら、他国に押し入る理由づけや、世論に訴えかける絶好の口実として掲げられたのは『ナチズムとの戦い』だからだ。前の大戦で二千万人以上を亡くしたあの国には、ナチスドイツと戦った歴史を輝かしいものとして刷り込まれている国民が多いから、ナチズムとの戦いと言われれば国民は納得してしまう。ウクライナとナチズムは関係ないような気もするが、ソ連からの独立を目指した一派がナチスと協力した時期があったことを理由に、「現在のウクライナもナチズムが支配している」とロシアは主張する。

しかし、いくら「ナチズムとの戦い」を掲げてても、戦闘の長期化に伴って犠牲者が増え続ければ、国民感情が反戦に傾きそうなものなのに、ロシアでは昔から兵士の命が軽い。『兵士は焔で採れる』という諺もあるほどだ。

モスクワなど大都市出身兵士の被害が増えれば反戦運動もあり得るが、最前線に投入されたのはブリヤート人やヤクート人などが多かった。彼らが戦死しても世論は動かないどころか、他人事と感じかねない。傭兵や囚人を投入しているのも同じことで、彼らが戦死しても反戦にはつながらないのだ。

核兵器の最大の利点は自国民の犠牲を抑え、敵に大きな被害を与えることだろうが、ロシアでは『兵士は焔で採れる』から、被害を抑えるという発想がそもそもない!?